

平成 29 年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果

小西 哲郎（がくさい病院 神内）
杉山 博（NHO 宇多野病院 神内）
廣田 伸之（市立大津市民病院 神内）
杉江 和馬（奈良県立医科大学 神内）
楠 進（近畿大学医学部 神内）
藤村 晴俊（NHO 刀根山病院 神内）
井上 学（大阪市立総合医療センター 神内）
狭間 敬憲（NHO 大阪南医療センター 神内）
吉田 宗平（関西医療大学神経病研究センター）
舟川 格（NHO 兵庫中央病院 神内）
関口 兼司（神戸大学大学院医学研究科 神内）
浅田留美子（大阪府健康医療部保健医療室 地域保健課）

研究要旨

1. 平成 29 年度近畿地区において、102 名（男 21 名、21%、女 81 名、79%）の「スモン現状調査個人票」を集計した。102 名中 8 名（男 2 名、女 6 名、平均年齢 80.4 歳）は患者本人が記載し、集計に同意が得られ、集計に加えたアンケート調査であった。102 名の平均年齢は 81.1+8.2 才（56~97 才）（男 79.2 才、女 81.6 才）で、81 才以上の高齢者が 54 名（男/女：10/44）と全体の過半数を占め、91 歳以上の超高齢者は 15 名（15%、男/女：2/13）であった。
2. 近畿地区全体の検診率は 44.2%で、年代別検診率では 60 歳以下以外のすべての年代で 40%を超えた。近畿地区別検診率では、患者数の多い府県での検診率向上が課題であった。
3. スモン患者の平均死亡時年齢は男女ともに我が国の平均寿命を超えていた。死因が特定できた 32 名の死因では、肺炎と悪性腫瘍が多く次いで腎不全であった。肺炎で死亡された 9 名中 7 名（8 割）が 81 歳以上の高齢者であった。
4. スモン患者全員が身体的併発症を有し、各種併発症のうち、心疾患・脳血管障害・糖尿病が加齢で増加した。悪性腫瘍経験者は 23 名（24%）（男性 5/19、26%；女性 18/75、24%）であり、女性 3 名には 2 個のがんがあり、男性 1 名には 4 個のがんがみられた。がんの部位は、男性では大腸がん 3 名、胃がん・前立腺がん各 2 名が罹患したが、女性では乳がん（6 名）、大腸がん（4 名）の罹患者が多かった。
5. 骨折経験者は 26 名（27.7%）で、頻度が多い骨折部位は、男女とも腰椎圧迫骨折であった。
6. 介護保険申請者は 65.7%であり、認定内容では 76.1%が要介護度 3 以下と認定された。介護保険の認定介護度の推移では、近年要介護 4 と 5 の頻度が増加してきた。認定介護度については、半数の患者は妥当と感じているが、28.4%の方が認定介護度を軽い方に認定

されたと感じた。

7. 在宅療養状況では、アンケート以外の 94 名の検診受診者の約 4 割が独居者であり、多くは女性であった。平成 15 年度以降の独居者の割合の推移を見ると、H25 年度からそれまでの 30%前後から 40%前後に上昇した。

8. 以上の結果をまとめると、近畿地区の検診率は 4 割であるが、患者数が多く検診率の低い府県での在宅療養状況の把握が課題であった。81 歳以上の高齢者の死因では肺炎が多く誤嚥性肺炎に注意が必要である。悪性腫瘍経験者は約 1/4 で見られ、がんの罹患部位では、男性では大腸がん、女性では乳がんと大腸がんの罹患者が多く、頻度の高い悪性腫瘍に注意すべきである。検診受診者の在宅療養状況では独居者が約 4 割を占め、多くは女性独居者であり、自立度が低下した独居者の在宅療養環境調査や在宅支援体制を整備する必要がある。

A. 研究目的

平成 29 年度の近畿地区のスモン現状調査個人票を集計し、スモン患者の医療上および在宅療養環境の問題点を明らかにする事を目的とした。

B. 研究方法

平成 29 年度に、近畿地区班員によって近畿地区の各地域で実施されたスモン検診において作成された「スモン現状調査個人票」を集計し分析した。今年度は調査票コピーを患者自宅へ郵送し記載可能範囲での個人票への記載を依頼して、郵送回収した「アンケート」を、併発症以外の項目の集計に含めた。統計学的検討は、Fisher の直接確立計算法を用い、両側検定で p 値が 5%以下の場合を有意とした。

(倫理面への配慮)

スモン現状調査個人票の内容のデータ解析・発表に際しては口頭あるいは署名により同意を得た個人票のみを使用することで、倫理面への配慮を行った。アンケートに記載し郵送回収に協力していただいた 11 名中、3 名はアンケート内容の解析・発表には同意されなかったため、この 3 名のデータは今回の集計には加えなかった。

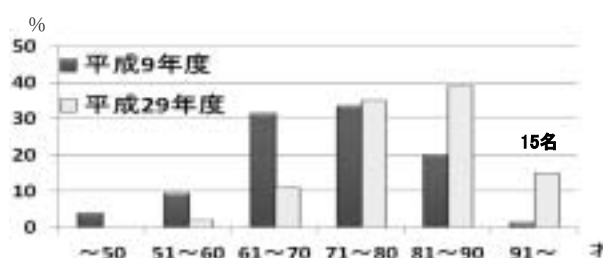
C, D. 研究結果と考察

検診受診率関連

平成 29 年度の近畿地区では、検診受診 94 名 (男 19 名、女 75 名、平均年齢 81.1 歳)、個人へのアンケート調査 8 名 (男 2 名、女 6 名、平均年齢 80.4 歳) の

合計 102 名 (男 21 名、21%、女 81 名、79%) の個人票を集計した。102 名の平均年齢+SD は 81.1+8.2 歳 (56~97 歳) (男 79.2 歳、女 81.6 歳) であった。81 歳以上の高齢者は 54 名 (男/女: 10/44) であった。H29 年度と H9 年度の受診者の平均年齢を比較すると、20 年間で平均年齢が 10.1 才上がり、81 才以上の割合が 22%から 53%に増大した。(図 1)。91 歳以上の超高齢者は 15 名 (15%、男/女: 2/13) で女性が多かったが、全体の男女比 (1: 4) と比べて女性が有意に多いわけではなかった。

今年度の年代別の検診率の検討では、60 歳以下以外のすべての年代で 40%を超えた。過去数年間 91 歳以上の受診率が低かったが、今年度は 42%に改善し、平均年齢も平成 28 年度の 80.4 歳から 0.7 歳増加した (図 2)。健康管理手当等受給者リスト 229 名の H29 年度の平均年齢は 81.6 歳であった。



	総数	平均年齢	男	女	81歳以上
H9	149	71	24%	76%	22%
H29	102	81	21%	79%	53%

図 1 平成 29 年度と平成 9 年度の年齢分布の比較

20 年間で平均年齢が 10 才高齢化し、81 才以上の割合が 22%から 53%へ増加した。91 歳以上の超高齢者は 15 名であった。

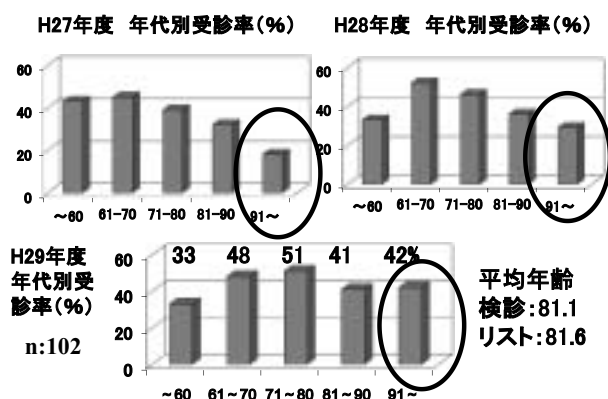


図2 H27～H29年度の年代別受診率

H29 年度は、60 歳以下の年代を除き、受診率 40%を超えた。H27 年度と H28 年度の 91 歳以上の超高齢者の低い受診率が 42 %にアップした（丸囲い）。健康管理手当等受給者リスト 229 名の H29 年度の平均年齢は 81.6 歳で、H 29 年度検診者 102 名の平均年齢は 81.1 歳であった。

今年度はアンケート調査を検診集計に加えたことで、近畿地区検診率は 44.2% (102/231) と過去最高の検診率に向上したが、患者数が多く検診率が低い府県での検診率向上が課題となった。検診率の向上には、従来の施設での検診や訪問検診に加え、行政との連携やアンケートの患者宅への郵送なども今後考慮する必要がある。

全国健康管理手当等受給者数と特定疾患受給証交付数の推移

平成 11 年から 28 年の全国健康管理手当等受給者数は毎年約 110 名づつ直線的に減少を続けている（図 3）。この受給者数の推移から得られた相関係数から仮想直線を引き、1970 年代近傍を検討すると、1971 年のスモン訴訟の提訴と 1979 年に和解した時の 6,490 名に近似した直線になった。当時のスモン研究班の疫学調査班では 1972 年末までのスモン患者数を 8,500 名と推定していることから¹⁾、実際のスモン患者は 6,490 より多いと考えられた。スモン患者の高齢化に伴い、スモン患者が医療機関を受診する機会が増えてきて、健康管理手当等受給者以外のスモン患者が、医療費の公費負担を求めて特定疾患受給者証の交付を受けると想定される。しかし、全国の実際の特定疾患受給者証の交付数は平成 27 年 4 月時点でも交付数は受給者数より 100 名あまり少なく、受給者数を超えてはいない。こ

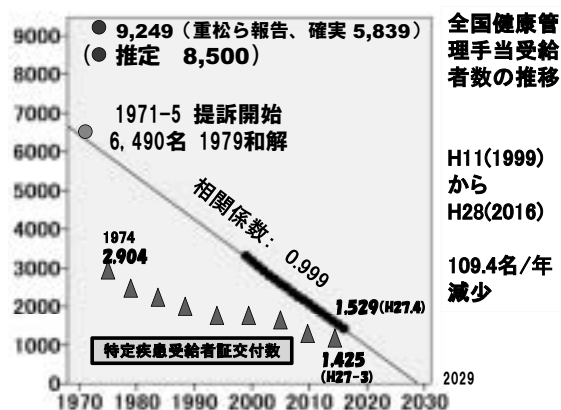


図3 全国健康管理手当等受給者数と特定疾患受給者証交付数の推移

特定疾患受給者証交付数は難病情報センターのホームページから取得した。H11～H28 年度の健康管理手当等受給者数の推移をもとに相関係数 0.999 の仮想直線を描いた。この仮想直線は 109.4 名/年の減少を示した。1979 年にスモン訴訟で和解した 1970 年代当時のスモン患者数 6,490 名はこの仮想直線近傍であった。他方、特定疾患受給者証交付数はゆるやかな減少傾向を示し、最近の交付数は受給者数に近づいているが、H27 年 3 月末では受給者 1,529 名に対して交付数は 1,425 名と交付数が 104 名少なかった。

これはキノホルム服薬歴が証明できずスモンと認定されないスモン患者が存在することや、医療機関にかかっていないスモン患者がいるためと思われた。健康管理受給者数と交付数とは都道府県により大きな差があり、昨年報告したように²⁾、全国都道府県の中で、大阪府が突出して交付数が受給者数より多く、交付数が30名ほど超えていた。大阪府以外は数名程度交付数が多いか、あるいはむしろ交付数が少ない都府県が多く、そのため全国集計では交付数が100名あまり少なくなっている。なぜ大阪府だけ突出して交付数が多いかの理由は不明であるが、今後の検討が待たれる。健康管理手当受給者数と交付者数との乖離を検討するためには行政との連携が必須である。

スモン患者の死亡時年齢と死因

2008 年まで NHO 宇多野病院に入院歴があり、死因が明確なスモン患者 23 名の平均死亡時年齢は、男 5 名の平均は 78.6 歳、女 18 名の平均は 84.3 歳と男女ともに当時の我が国の平均寿命を超えていた (図 4)。最近 4 年間で、死亡時年齢が明確になった京都府在住スモン患者は男 6 名 87.5 歳、女 9 名 92.4 歳と男女と

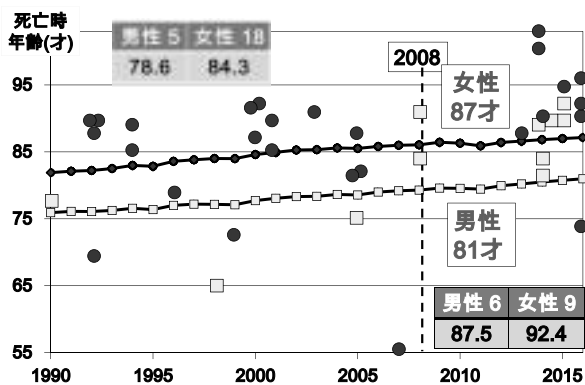


図4 全国の男女の平均寿命と京都府で亡くなられたスモン患者の死亡時年齢との比較

全国の男女の平均寿命と京都府で亡くなられたスモン患者の死亡時年齢との比較。2008年までに、NHO宇多野病院で亡くなられた男性5名の平均死亡時年齢は78.6歳、女性18名は84.3歳であった。男女ともに全国の平均寿命をわずかに上回っていた。京都府在住スモン患者で、過去4年間に亡くなられた患者の平均死亡時年齢は、男性6名は87.5歳、女性9名は92.4歳で、男女ともに全国平均寿命を5-6歳上回っていた。

もに全国平均寿命（男81歳、女87歳）を5-6歳上回っていた。京都府在住スモン患者の死亡を含めた情報は、京都スモンの会が毎月発行する会報の患者情報を参考にした。何故スモン患者の死亡時年齢が平均寿命より高齢であるかは不明であるが、スモン患者の平均寿命の高齢化に、スモン検診がその一翼を担っているのであればスモン検診の意義も深まると考える。NHO宇多野病院の入院・外来関連のスモン患者のうち、死因が特定できた32名の死因は、肺炎と悪性腫瘍が多く次いで腎不全であった。特に注意が必要なのは、肺炎（誤嚥性肺炎と考えられる）で死亡された9名中7名（8割）が81歳以上の高齢者で、高齢者は誤嚥性肺炎に注意が必要で、特に高齢者の場合は発熱や白血球増多などの炎症に対する身体反応が弱くなっているため、発見が遅れて重症化する傾向にある。そのため誤嚥性肺炎の早期の段階で適切な治療を受けることが重要である。

スモン併発症関連

アンケート調査では身体的併発症の記載が不十分であることから、アンケート調査結果は併発症関連のデータの集計から省いたため、検診受診者94名のデータを集計した。併発症は全例に認められ、高血圧と心

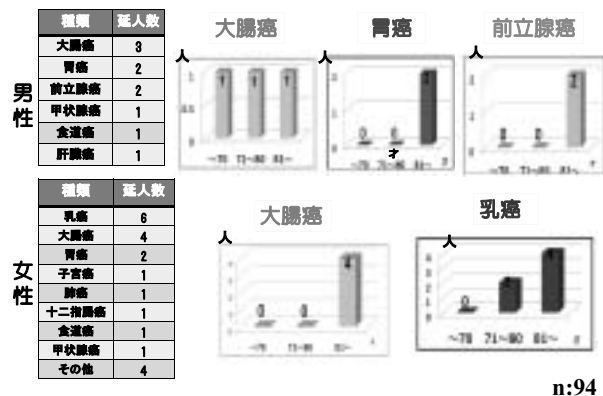


図5 男女別悪性腫瘍併発の頻度

男性では大腸がん、胃がん、前立腺がんが2名以上併発し、胃がん、前立腺がんは81歳以上の高齢者に見られた。女性では乳がん、大腸がんが特に多く見られ、高齢化で頻度が増加した。

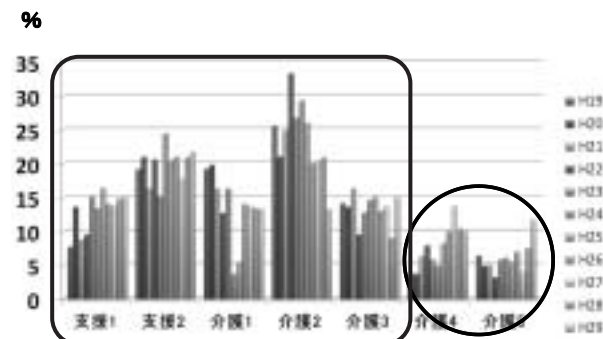


図6 平成19年度以降の年度別認定介護度の分布（%表示）

毎年、認定介護度の要介護3以下が全体の7-8割を占めるが、4-5年前から要介護4と5（○囲い）の介護度の高いスモン患者が増加してきた。

疾患、脳血管障害、糖尿病は加齢とともに罹患頻度が増大した。

悪性腫瘍経験者は23名（24%）（男性5/19、26%；女性18/75、24%）であり、女性3名には2個のがんがあり、男性1名には4個のがんがみられた。がんの部位は、男性では大腸がん3名、胃がん・前立腺がん各2名が罹患したが、いずれも81歳以上の高齢者であった。女性では乳がん（6名）、大腸がん（4名）の罹患者が多く高齢に従って人数が増加した（図5）。骨折経験者は26名（27.7%）で、圧倒的に女性に多く（男2/女24名）81歳以上の患者で骨折経験者が多かった。頻度が多い骨折は、男女とも腰椎圧迫骨折であった。

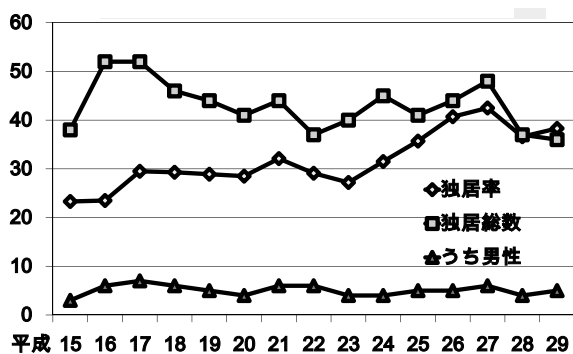


図7 H15年度からの年度別の独居者総数、男性独居者数と独居者比率（独居率）の推移

独居者の8割以上は女性独居者である。10年前から独居者総数は約40名、うち男性は5名前後で推移しているが、独居率は5年前からそれまでの3割から4割に上昇した。

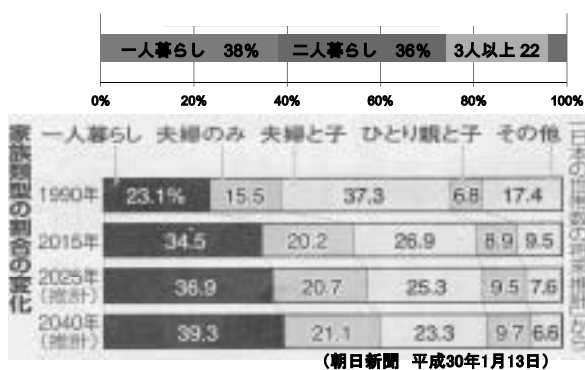


図8 近畿地区94名の患者の療養状況

独居36名（38%）、二人暮らし33名（36%）、三人以上21名（22%）であった。近畿地区の独居率は、下段の国内の2040年における予想独居率（39.3%）に近傍になっていた。

介護保険関連

102名のH29年度の介護保険申請者は65.7%であり、認定内容では76.1%が要介護度3以下と認定された。平成19年からの認定介護度の年度ごとの推移をみると、4-5年前から要介護4や5の割合が明らかに増加し、スモン患者の一部では身体障害が重症化していることを示していた（図6）。認定介護度の妥当さに回答した約半数は、認定介護度が妥当であると感じたが、約3割は思ったより軽い介護度に認定されたと感じた。

在宅療養状況

在宅療養状況では、94名の検診受診者の約4割（39名）が独居者であり、独居者の多くは女性（男/女：6/33）で84.6%を占めたが、全体の男女比と比べて女

表1 府県別検診受診者中の施設入所あるいは一人暮らしの割合

府県名	独居者数 (うち施設入所者)	受診者数	入所者入れた独居率
滋賀	7 (1)	13	46%
京都	4	14	29%
大阪	15 (2)	37	41%
兵庫	7	17	41%
奈良	1	4	25%
和歌山	5 (2)	9	56%
全体	39 (5)	94	41%
平均年齢	83.1歳 (入所者以外)	81.1歳	

京都と奈良が少ないが、和歌山では施設入所と一人暮らしが半数を超えていた。検診受診者の平均年齢81.1歳に比べ一人暮らしの平均年齢が83.1歳と、2歳高齢化していた。

性が有意に多いわけではなかった。平成15年度以降の独居者の経年推移を見ると、10年前から独居者総数は約40名前後で、うち男性は5名前後で推移していたが、独居者比率（独居率）は5年前からそれまでの3割から4割に上昇した。（図7）。近畿地区在住94名の患者の療養状況のうち、同居人数の調査結果は、独居36名（38%）、二人暮らし33名（36%）三人以上21名（22%）であった（図8）。我が国における独居率は、現在の35%前後から2040年には40%近くに上昇すると予想されているが、スモン患者の独居率はすでに40%前後の高い数字を示していた。

E. 結論

平成29年度の近畿地区スモン検診の結果、検診受診者の平均年齢は81.1歳となった。91歳以上は15名（15%、男/女：2/13）で、最高齢者は97歳の女性であった。

検診受診者全員が併発症を持ち、併発症のうち悪性腫瘍経験者は約1/5の患者で見られ、特に81歳以上の高齢者で頻度が増加した。がんの部位では、男女ともに大腸がんが多いが、男性では胃がん、女性では乳がんと子宮がんの罹患者が多く、高齢者ではこれらの頻度の高い部位の悪性腫瘍に注意すべきである。

介護保険申請者は高齢化に伴って増加し、約2/3の患者が申請した。多くのスモン患者は要介護度3以下に認定された。4-5年前から要介護4と5の高度な介護を必要とする身体障害が高度な患者の割合が増加しており、高齢化による自立度の低下を反映していると

考えられた。検診者の在宅療養状況では、約4割が独居者で、自立度の低い独居者の在宅療養環境調査や在宅支援体制を整備する必要がある。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) Shigematu I, Yanagawa H, Yamamoto S and Nakae K. Epidemiological approach to SMON (subacute myelo-optico-neuropathy). Jap J med SciBiol, Suppl. 28: 23-33, 1975.
- 2) 小西哲郎他：平成28年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果。厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班，平成28年度総括・分担研究報告書 68-73, 2016